湖月抄

のわき　廿八

別 3
60
1

ガラス使用

帝國圖書館藏

ガラス使用

このあそびどもの
細　持仏とハせゝくにかれ代
いまこ念誦堂（ねんずだう）ハいでき
ざる故に六条院にて
源の末々し給へるせ
座々くもつ給ある
師　源氏若の御心ざし
にて持仏の御まへのひ
ども此女三宮にやがて
とハ御念誦堂の
具どもまゐらせらるゝを
此供養にはつかはれさ
るとなり

よろづのてうどをも
師　仏のぜんのてびら
どあけてうしろの方に法
花の曼陀羅（まんだら）をかけら
幸の法云の飛ばされ
御帳ハ常の帳台之うち
寝よりて御帳とハ

夏ごろはちすの花乃盛（さかり）に。入道の姫宮（細　六条院池の蓮也）（細　女三のみやし）
の御持仏（ぢぶつ）どもあらはし給へる。供養（くやう）ぜ
させ給。このたびハおとゞ（源）のきみの御心ざしにて。
御念誦堂（ねんずだう）のぐども。こまかにとゝのへさ
せたまへるを。やがてしつらはせ給。はたのさ（孟　幡也　抄　おまへの事）
まなどなつかしう。心ことなるからの（仏おまへよりくる幡也）
にしきをえらびぬはせ給へり。紫の（抄　源より志給ふさまを）
うへぞいそぎせさせ給ける。花づくゑのおほ（紫上の御心もえてなさせ給ふ）（師　花机覆也）
ひなどのをかしきめぞめも。なつかしうきよ（細　染てある物也　抄　今の世のこゝろやうの紙也）
らなるにほひ。そめつけられたる心ばへめ（細　仏壇よりまへ　孟　女三の帳台を持仏堂）
なれぬさまなり。よるの御ちやうのかたびらを（みちやうのかたびら）
よおもてながらあげて。うしろの方に法花の（細　四方の帷をあくる也）

鈴虫　哥并　細　巻ノ名以ニ哥并ニ詞ヲ号ス之ヲ　詞ニハすゞむしの
ふりいでたるとも　鈴虫ハ心やすくいまめいたるこそともあり
哥ハ大かたの秋をバうしとしりにしをふりすてがた
きすゞむしのこゑなどあり　細　源氏五十歳の夏より秋
までのことなり。哥乃并なり　花孟　源氏五十歳横笛の
次の年なり。又夕霧同世歳

閑慶庵圖書部

岡本氏藏書記

よもに四方にきこゆるのうきび
らとしれるべし
ひとの百ぶの　細　唐の方
そあらせしうかるをや。
名義三ニ香ハ是離織之名。
人中ノ臭氣上テ薫ス於空ニ四
十万里諸天清浄ニシテ無不ト云フ
厭ハ也　花　百ぶのくのえ
りうとくくきこうかもえ
けうじの菩薩
細　脇士ハ觀音勢至也。觀
經ニ無量壽佛住立空
中ニ觀世音大勢至是ニ
大士侍立左右ニ
あをきゝあかき紫のく
らを　花　是ハ紙と紙
て閼伽皿にのくとくさ
今もかくするゝ人の了り
みちをくし　細　蜂蜜
ことさら物よハ蜜の人を
蜜とのをさきうかすよ
りつくしうをと
こうくのは指經也そ
花　天暦九年正月四村上天皇

河　曼荼羅　細　名義集七　蒲荼羅ト　此ニハ翻壇ト
まんだらかけ奉りてしろかねのかびん
にたかくことゝしき花の色をとゝのへて（細　蓮花なるべし）
奉れり。名香にハからの百ぶのかうを（花　荷葉衣のかう）
たき給へり。あみだ仏けうじの菩薩をの（師　脇士ハ觀音勢至也）
の〱びやくだんしてつくりたてまつりたる。こま
かにうつくしげなり。あかの具ハ例のきは（阿加　甌水ト名義集）
やかにちひさくてあをきしろき紫のはち
すをとゝのへてかえうのはうを合せたる名香。（細　荷ハ蓮葉の方也　河　荷葉方）
みつをかくしほゝろげてたきにほはしたる。
ひとつかをりに匂ひあひていとなつかし。経ハ（嘆　蜂の蜜を合すへし　百歩香と荷葉と合するへし）
六道の衆生のために六部かゝせ給て、みづか
らの御持経ハ院ぞ御てづからかゝせ給ける。（細　女三宮の持経也）

為ニ二母后ノ被ル供養セ宸筆ノ
法華經ヲ有リ八講
これをだに此世の結縁
細　源と女三宮と今生
の契もうすくなりぬる
よりてなり
すみつきのうへにかゞやく
細　けかけたる金のすぢよ
りも源の墨付ハかゞやく
となり
これハことに源のけいしく
河　流ト新紙　細　源氏自
筆の経ハ別にまうく

これをだにこの世の結縁にてかたみにみち
びきかはし給べき心を願文につくらせさ
せ給へり。さてハ阿弥陀経。からのかみハもろ
くて朝夕の御てならしにもいかゞとて、かん
やの人をめして、ことにおほせごと給ひて
こゝろことにきよらにすかせ給へるに。この春ころ
ほひより。御心とゞめていそぎかゝせ給へる
かひありて、はしを見給ふ人々めもかゞや
きまどひ給ふ。けかけたる金のすぢより（河　罫　又埒　金筋）
もすみつきのうへにかゝやくさまなども
いとなんめづらかなりける。軸へうし箱の
さまなどいへばおろかなりし。これハことに

えのあく乃ハ導師のまへにおくべし
出すてくらいのうへに
花机 帳台のうへに仏とおなじく経の机をならべらるべし河海白金の説おほやまれり

らのはなちらしひは
抄 女三の宮におはします所は道場となされたる也

そらにたくは
細 そらたきとなるべきやうなる事也

ぢんのけそく（ゑ系イ）のつくゑにすへて、仏の御おなじちやうだいのうへにかざらせ給へり。（抄 法会などにかざりたる道場也）だうかざりはてゝ講師（かうじ）まうのぼり、（小 行香とは又行道の所にて香を配る人也）ぎやうかう（行）の人々まいりつどひ給へば、（抄 源の法会のあなたへ出給ふ也）院もあなたに出給ふとて、（孟 源の女三の方とのさかひの道）宮のおはしますにしのひさしにのぞき給へれば、せばき心ちするかりの御しつらひに、所せく（孟 暑気）あつげなるまで、ことことしくさうぞきたる女房五六十人ばかりつどひたり。きたのひさしのすのこまでわらはべなどはさまよふ。（抄）ひとり（火取）どもあまたして、けぶたきまであふぎちらせば、さしよりたまひて、そら

へのかく 孟 源の詞より
て空薫ならぬはよく
くゆりみちいでたるや
うなのやうにする也
講経の説く
ことわりの 細 講説 講釈
人々ひそかによくして説
法をきくべしと也

例のもの深からぬわか人
孟 女三の宮の方の人々の事
まだいはけなく 孟 おとなしく
なき女房をもいふべし

あれなる也 孟 ことし
物よりかゝるゝ事也
なるべし

とりなされてうきあはれ
なるさま 抄 鈴虫の本意
に源のこの語で物語く

にたくはいづくの煙ぞと思ひわかれぬこそよけれ。冨士の嶺（みね）よりもけにくゆりみちいでたるは、本意なきわざなり。かうぜちのをりは大方のなりをしづめて、のどかにとくことの心もきゝわくべきことなれば、（尊き法衣の音なひのきこえなどいふ心也）はゞかりなききぬのおとなひ、人のけはひ、しづめてなんよかるべき。など例のものふかゝらぬわかうどどもの用意（ようい）をしへ給ふ。宮は人げにおされ給ひて、いとちいさくをかしげにてひれふし給へり。（孟 若君のこゝへ源おはしまさぬなど）若君らうがはしからん。いだきかくしたてまつれなどの給ふ。（抄 源のみこゝろの心）北のみさうじも（師 まん殿の北の障子也）とりはなちてみすかけたり。

らぬくとハ女三の独受戒し今ハ各別なるしるしと云也もろともといふも

細 宮ハくの用意をとし給ふよりハ女三宮へ経のわかるべき事也きかせ申べし

ミやり給ふもさま〳〵に ハ仏極と源の見給へりつけても女三の不義あるくハ尼ともなりまいらせじなどいかゞと思しかゝるこのいとなみことも

抄 源の心ハ女三ハ源の語によりてこそ世をも背給へハ源の御なさけふかきぞとハおもひしりしとぞ

かの花のなかのやどり 一蓮托生の心也 河 各留テ半座ヲ乗ス華葉ニ 五會讃 くらすゝふと 細 五會讃ニ 下之 池中花盡満花〻惣是往生人各留テ半座ヲ

くはいれ給ふ。しづまりて宮にも物の心しり給ふべきしたかたをきこえしらせ給ふ（よろづの用ことをし）いとあはれに見ゆ。御座をゆづり給へる（師 源へある宮往生表なりと云し）（細 女三宮の御座をゆづりし仏極なり）仏の御しつらひ見やり給ふも（源の心）さま〳〵に かゝるかたの御いとなみをも。もろともにいそがむ物とはおもひよらざりし事なり。（抄 宮ハ今生までこそハ女三の源をいとひすてゝあるとりころんて）よし後の世にだにかの花のなかのやどりにへだてなくとおもほせとてうちなき給ぬ

源

はちす葉をおなじうてなと契りおきて露のわかるゝけふぞかなしき（細 花の扇也）（師 女三の宮也）。御硯にさしぬらして香染なる御扇にかきつけ

乗ス華葉ニ待ツ我閻浮同行ノ人とあり。今ハ各別になるを露の別るゝとハいへり

へだてなく 細 女三宮のやく。源の心ハ此世まとめあふべきと云べしまゐて 抄 へだてなくと云ハ終末の事をちぎりよりしも源ハ我一蓮なるをすまじとも

七僧 細 講師 読師 呪願 三禮 唄 散華 堂達

師 おほかたハ紫の上のあつ

給へり。宮

へだてなく蓮のやどをちぎりてもきみがこゝろやすまじとすらんとかき給へれば（各段）いふかひなくもおぼしくたすかなと（抄 源の詞也）うちわらひながら猶あはれと物をおぼしたる御気色なり。例のみこたちなどもいとあまたまゐり給へり。（紫上 花ちる里などなるべし）御かた〴〵われも〳〵といとなみいで給へる捧（抄 捧物之）物のありさま心〳〵にところせきまで見ゆ。七僧の法服などすべて大方のことどもはみな紫の上せさせ給へり。あやのよそひにて（師 あやをそめけさ）袈裟のぬひめまで

見しる人ハ　岷　めいや
うちとしれる人の
事也

たゞ今の世にざえもすぐ
れゆたけきさきらをと
師　講師の才覚もよく
まうしひらきし　孟　さえ
ハ才也ゆたけきハゆたかい
なる也。さきらハ弁舌
なり

しる人は。よになべてならずとめで（細　草子地也）
けりとや。むつかしうこまかなることどもなれ。
（講師　孟　是講座にのぼりて表白とよむこと）うじのいとたうとく事の心をまうして。
（細　女三宮ハ出家の身なり）此世にもすぐれ給へるさかりをいとひはな
れ給て。ながきよゝにもたゆまじき御契を。（抄　源と女三とのちぎり也）
（ちぎりをいとく）法花経にむすび給。たうとくふかきさま
をあらはして。（講師の事）たゞ今の世にざえもすぐ（河　才覚也　細　弁舌也）
れ。ゆたけきさきらを。つくしていひ
いでける。いとたうとければ。みな人へぐ（細　内々の事也）
しほたれ給。これはたゞしのびたる御念誦（ねんず）
堂のはじめとおぼしたる事なれど。うち（ども　供養のはじめ也）（今上）
にも。山のみかどもきこしめして。みな（孟　朱雀院也）

夕の寺におき所なげなる
まで　細　御布施の多きを
云り　講説をへてかへる時
かうの事面白き云事
也。重疊煙嵐之断處
晩寺僧帰ル　花　僧ども
かへりけることをふまへてそ
夕のてらとかけるに面白し
院のこと也　細　朱雀院
也。三条宮とも　[illegible]
おりゐのみかどもはら
がして出給へり
ましまして　いふなり
抄　朱雀院ハ後にハ女三の宮
まづきたまへれバ三条へ

御つかひどもあり。御誦経（ずきやう）のふせなど。いと所（花　御誦経の布施也）
せきまで。にはかになむことひろごりける。
（細　六条院也）院にまうけさせ給へりける事どもも。そぐ（孟　省略）（おほやうなれどもとく）
とおぼしゝかど。世のつねならざりける
を。まいて。いまめかしき事どものくは（内　朱雀院よりの御布施の事也）
はりたれバ。夕（ゆふべ）の寺（てら）におき所なげなる
まで。所せきいきほひになりてなん。
僧どもハかへりける。今しも心くるし（細　前とかハりて今しもくるしきよし）
き御心そひて。はかりもなくかしづききこ（孟　女三を源の更に思給也）
え給ふ。院（朱）のみかどハ。この御しよぶんの宮（女三ノ）
にすみはなれ給なんも。つゐのことに
てめやすかりぬべくきこえ給へど。よそ（源のはからひのよし）

細よそ〳〵ならんと源の
心のまゝにつかうまつりがたくて
いかゞ六条院よりあつかひを
也
ありはてぬ世
河ありはてぬ命まつまの
ほどばかりうきことしげく
おもはずもがな
この宮もつくらせ
源氏君つくらせ給ひ
くらふの物をおさむる
めとらる也

よそにてハおぼつかなかるべし。明暮見たてま
つり。聞えうけ給はらんことをこたらん
本意たがひぬべし。げにありはてぬ世
いくばくあるまじき身なれど猶いける限の
心ざしをだにうしなひはてじときこえ
給ひつゝ（細 三条の宮の事）（哢 女三宮のおはしますべき所）此宮をもいとこまかにきよらに
つくらせ給ふ（女三の御かたの事）御ふの物どもくに〴〵の御さう（小荘）。
みまき（御牧）などよりたてまつる物どもはか〴〵し
きさまのは、みなかの三条の宮の御くら（みくら）にお
さめさせ給ふ。又たてそへ（孟 蔵）させ給てさま
〴〵の御たから物ども、院の御そうぶん（弄 朱雀の女三へ御処分のこと）
（らちのく）にかずもなくたまはり給へるなどあたり

御めのとふる人どもハ
女三の御めのとなど也
孟此やうなる人々は尼
猶いまさかりなる人も
御弟子になるなるべし

〳〵御の物ハ、みなかの宮（三条）にはこびわたし、こ
まかなる御さま、いかめしうしあつめさせ給。明暮の御かし
づき、そこらの女房のことゞも、かみしもの
はぐくみは、おしなべて我御あつかひ（乗 源の御せわ）
にてなん、いそぎつかうまつらせ給ける。
（哢 女三宮のかたはらの西の）秋比、西のわた殿のまへ、なかのへいの
東のきはを、おしなべて野につくらせ（孟 虫をはなち給はん為の野也）
給へり。あかのたな（棚）などして、その方にし
なさせ給へる御しつらひなど、いとなま
めきたり。御でしにてしたひきこえたる尼（細 尼となる人々）
ども、御めのと、ふる人どもは、さるものにて、
わかきさかりのも、心さだまり、さるかぎり（後まで出家をとぐべきをえらびて）（さかりの女房）

わかきさかりのも心さだまりね
人すくしもあるべし
孟 源のとくゐのみこゝろ
おしき人のあれども引そ
こゝは稍とく。弄 思ひはなれし
かさんし おんさゞまう
ぬがまじうて八逆のつあ
おしきらし 源のふ別
なり
この野に虫ども
おまへのまへのくま
へ中のへいの東のきは
をおしなべて野に作り
てらせ給ふとある 孟義
例の御心とあるまじき事
よ お 源のうたひ
なやましまつる花なれ

さるかたにて世をつくしつべき限はえりてなん（尼になる人）
なんなさせ給ける。さるきほひには我もく（あらそひすゝみしと）
ときしろひけれど。（源）おとゞのきこしめし
て。（細）あるまじきことなり。こゝろならぬ人
すこしもまじりぬれば。かたへの人のくる（源のことば）
しう。あはつけききこえ出くるわざな
りと。いさめ給て。十よ人ばかりのほど（抄 尼になる十餘人と）
ぞ。かたちことなるかぎりはさぶらふ。この野に（孟 尼よろしき 尼ならぬもありと云）
むしどもをはなたせ給て。風すこし（抄 源の女三宮の方へおはしたると）
涼しくなりゆく夕暮に。わたり給つゝ虫の（細 源也）
ねをきゝ給ふやうにて。なをおもひはなれぬさ（細 女三宮之）
まをきこえなやまし給へば。例の御心

ぞくやうの事もある故
じさるまうづと女三
の思ひしくおぼすなり
人ばなれたらん御すまひ
御もがな
孟 源のおほきなる三條へ移そ
おはしませども、それはい
どと女三の心也 抄 三条
宮つもうつくしかりせ
どもえすゝみさうしなるそ
さもえのたまはず之
十五夜の月のまだき夕ぐれ

はあるまじき事にこそあなれと。ひと
へにむつかしき事に思ひきこえ給へり。（女三の宮の源氏を）
人めにこそかはることなくもてなし給ひしか（抄 女三の宮を世間の人めをつくろひ給へと 源氏の）
うちにはうきをしり給ふけしきしるく（抄 柏木のことよりそ）
こよなうかはりにし御心を。いかで見え（柏木のこと源も知給ふしるし）
たてまつらじの御こゝろにて。おほうは思
ひなり給にし御世のそむきなれば。今は
もてはなれて心やすきに。猶かやうになど
きこえ給ふぞくるしうて。ひとばなれたら（女三の心）
ん御すまゐにもがなとおぼしなれど
およすけてえさもしひ申給はず。十五夜（細 ぞんじよう）
の月のまだき夕暮に。仏の御ま

抄八月十五夜よりさきころ
しるし

あみだの大呪　河 阿弥陀陀
大呪（弄）仰 阿弥陀真言也。
ふかいじやと後ぞ。源も
此大呪を誦する也

松むしのこゑ　松虫の声也
孟 松虫のこゑとある本あり
の文字入るよしとぞ

へ宮（孟 女三也）おはして、はしちかうながめ給つゝ
ねんずし給。わかき尼君たち二三人花奉
るとて、ならすあかつき（閼伽器 孟 花皿也 抄同）のおと、水のけ
はひなどきこゆる、さまかはりたる（仰 かのあまでも心を付て出家かたしと）いとなみに
そゝきあへる（そゝめきあへる也）、いと哀なるに。例の（抄 源の女三ノ御方）
わたりまして（へおはします）、虫のねいとしげう（源の宣ふ詞也）みだるゝゆ
ふべかなとて、我もしのびてうちずじ給。
あみだの大ずいとたうとくほのぐきこゆ。
げに（すゞ虫のねいと志げうとありしを此すゞ虫はよそうけたり）こゑぐきこえたる中に、すゞむしの
ふりいでたるほど、花やかにおかし。秋（細 源の詞也）の虫の
こゑいづれとなき中に、松虫のなんすぐれ
たるとて、中宮（細 秋好也 中宮の事なるべし）の、はるけきのべをわけて、

しるくなきつたふる
細 野をわけてとりてはなたせ
給ふ虫なれど、いつしか家
くなるべきをすくなきもある
へしと也

いとへだて心ある虫になん
細 うとうとしけるさ虫
ともしんぞよむべきとも
ある女三のうへをいひませ
よりきく

いまめいたるこそ　細 今めき
よろし 源のみこの心はよろけ
たる方 是皆上たる人さき
世を捨てく御出家の心も
うらみつるにもとりなし
まふべし。されど此虫
は捨がたしと也

いかにとかや　孟 いかにとは
何とぞ秋をうしと云心

いとわざとたづねとりつゝ（松虫也）はなたせ給へる、
しるくなきつたふる（仰 放ちてのちそのまゝはなるゝよし）こそすくなかなれ。
名にはたがひて（細 まつむしは名のみ 孟 松虫といへば命長かるべきを也）、命の程はかなきむし
にぞあるべき。心にまかせて人きかぬお
くやまはるけき野の松原に声
をしまぬも、いとへだて心ある虫になん
ありける。すゞむしは心やすく、いまめいた
るこそらうたけれなどの給へば、宮（女三）
（孟 女三之哥也 秋とはうきへあり捨がたしと也）おほかたの秋をばうしとしりにしをふりす
てがたきすゞ虫の声と忍びやかにの給ふ。
いとなまめいてあてにおほどかなり。いかに（源詞）
とかや、いで思ひの外なる御ことにこそとて

まふでしくとりめでてのすゞ虫の御こと　愚按　花鳥に此義はよそにもとかれつゝやいそがはしのおほかたの秋をばうし　すてがたき世を捨るゆへと云ひの心かなとしふりすて　細　女三宮を捨出家してそむかれたれはまだ思ざりし物をとなり花すく虫は女三宮にたとへらんおかり草の庵どりといふは此世をそむかれおふんなり女三宮をさしふりかへんとおほすをうしとてふくみとの心也琴はもてひきなどこそり師琴をは源はよくなるゝひ給ふなよそくめでたくまれしかさの御数珠を例よりもあはれなるねは女源の心々世うつる盛衰を時々の事思食のこされる哀なる琴の音にも感慨あるへし

（源）心もて草のやどりをいとへども猶すゞ虫の（孟女三宮着経）声ぞふりせぬ（地）など聞え給ひて、きんの御ことめして、めづらしくひき給ふ。（孟源也）宮の御ずゞひきおこたり給ひて（とおきて琴をきゝ給ふ也）御琴に猶心いれ給へり。（細　おほかたのうきをきゝなとあるへき心也）月さし出ていとはなやかなるほども、あはれなるに（源の心也）空をうちながめて、世中さま〴〵につけて、はかなくうつりかはる有さまもおぼしつゞけられて、例よりもあはれなるねにかきならし給ふ。（孟八月十五夜なれとも）今宵はれいの御あそびにやあらんと（孟おしはかり）おしはかりて（六条院へ）兵部卿宮わたり給へり。

久しくたえにたる

孟　兼之の説又は女三のまくの法をすゝめられし物のねなどきかまほしかりつるひとりごと

おほ　源の御ことふしも法経などにもあらずてなかなかに琴をひきなしまかせしとしうちの御前へもまゐらせたまはん

月のえん

河海　延喜比時八月十五夜宴叡慮の萩にて詩人有の御事にも月の宴あるべそ侍りけりのこと　常康親王うちよりまうでたりけるに秋の月雲の上こそなかりけれやらるれ　拾遺集

（晩　夕霧也人々ぐし参給ふ）大将の君殿上人のさるべきなどぐしてまゐり給へれば（晩　女三宮の御方也）こなたにおはしますと（是も夕霧也）御ことの音をたづねて、やがてまゐり給ふ。いとつれ〴〵にて、わざとあそびとはなくとも（細　源の詞也）久しくたえにたるめづらしき物のねなどきかまほしかりつるひとりごとを、いとようたづね給ひけるとて、宮もこなたに御座よそひいれたてまつり給ふ。（孟　兼之）（細　内裏也）内の御前に、こよひは月のえんあるべかりつるを（法経之）とまりてさう〴〵しかりつるに、此院に人々参り給ふと聞つたへて、これかれ上達部なども参り給へり。（源）虫のねのさだめをし給ふ。御ことゞもの

月見るよひのいつとても
細 三五夜中新月色
いひても月ハ秋く
あはれをそへてこよひ
のめづらしきを
げにわが世のほかまでこそ
二千里の外と云心をも
ちそへけるに我世のほかま
でといへり。今夜の月
よみりひのくまなき
とも
此詞とのたまふも柏かうし給
師 愁着ハ甚吟悲といへバ
かゝる時ハ琵琶の音もなを

めをし給ふ。御ことどもの声々かきあ（源の詞也）
はせて。おもしろき程に。月見る宵の（よひ）
いつとても物あはれならぬおりはなき中に。こ（孟 四季ともに月ハ面白けれどことにひ也）
よひのあらたなる月の色にはげになほわ
が世のほかまでこそよろづ思ひながさるれ。（細 柏木也 彼詩の故人心といふより柏木のうへを思ひ出給ふ也）
故權大納言なにのおり〱にも。なきに
つけていとゞしのばるゝことおほく。おほや
けわたくし。物のおりふしのにほひうせたる
こゝちこそすれ。花鳥の色にも音にも（柏木のうへをのたまふ）
思ひわきまへ。いふかひあるかたの。いとう（細 うるさかりし）
るさかりしものを。などのたまひ出て。みづから（孟 源也）
もかきあはせ給ふ御琴の音にも袖ぬらし

なさけうすくし
かゝるあそびのわざには
孟 女三のことさえハ曲す
されど此巻の詮などは
柏を源のおもひ出るも

御ぜんの御あそび
細 是より冷泉院より
御せうそこありける詞
又夢子説によりけり。左
大弁ハ紅梅の事とぞ夢
大輔ハ系図なり

給ひつ。御簾のうちにも耳とゞめてや聞（曉 女三宮柏木のことをきくにおもひやらる）
給ふらんと。かたつかたの御心にはおぼしながら（源の）
かゝる御あそびのほどにはまづこひしう（曉 主上を柏木と云ハわろし）
う。内などにもおぼし出ける。こよひは（源の詞也）
すゞむしのえんにてあかしてんとおぼし（孟 源也）
のたまふ。御かはらけ二わたりばかり
まゐる程に。冷泉院より御せうそこあり。
御前の御あそびにはかにとまりぬるを（孟 内裏也）
くちおしがりて。左大弁。式部大輔。又人々ひ
きゐて。さるべきかぎりまゐりたれば。（孟 夕霧也）（冷泉院へ也）
大将などハ六条院にさふらひ給ふときこ（冷泉院の詞也）
しめしてなりけり

雲のうへを　細　院をさして云也しりぞかせ給ハぬ所なり。物わすれせぬとハ月ハ忘れぬ心也　異　月も忘れぬなり　孟　冷泉院今ハ仙洞なれバかけはなれたるすみかとも思すらくハ　細　わすれぬ夜の月と兼て思ふドくハんまれん。よしせずやのくわり。同じくハ源まいり給へかしと也

月かげハ　細　御返哥也わかれの月とも見えてしか我宿からの哀あはれしと花山院の御製に此心あり　異　源卑下の心にも在又冷泉院御位をさりましませども同じ光とハ見えながら

（冷泉院）雲のうへをかけはなれたるすみかにも物わすれせぬ秋の夜の月。おなじくはときこえ給へれば。（孟　源御之歌もくしうらん君と卑下の心を書之）なにばかり所せき身のほどにもあらずながら。（孟　脱屣されて）今はのどやかにおはしますに（源氏のこと　細　まいりなるべきを）まいりなるゝ事もをさ〳〵なきを（冷泉院の心）ほいなきことにおぼしあまりておどろかさせ給へる。かたじけなしとて（源の冷泉院へ）にはかなるやうなれどまいり給はんとす（源）月かげハおなじ雲井に見えながら我宿からの秋ぞかはれる（師　記者の詞）ことなることなかめれど。（孟　源の御思ひの事を記）（冷泉の）たゞむかしいまの御ありさまのお（源の心）

師　秋宮かうのことハ源氏の御身上のことかしこに書れたりとぞ　御卑下もふくの御事　孟　冷泉位後之　細　御使のさんふくめされんとおもはれしを儀よまうするし

左大将　紅　致仕大臣の子之藤宰相也の孫もありきこしめされたるなりらるゝ　孟　直衣布袴などのよそほひ下襲をなにそへずしてまいらせかへさせけるとし

河　直衣布袴事　西宮抄云　上臈着直衣下襲（下襲ニ）随便不常事之

新　是ハ源氏と冷泉又二人ぐしの院のゝしかり　細　源の御使を参る也

ぼしつゞけられけるまゝなめり。（冷泉院の御使）御使にさかづきたまひて。（河）禄（二无）いと二なし。人〳〵の御車しだいのまゝにひきなをして御前の人〳〵たちこみて。しづかなりつる御あそびまぎれて出給ひぬ。（孟　源と冷泉と同車之）院の御車に（孟　夕霧）みこたてまつり。大将（孟　紅梅也）左衛門督。藤宰相などおはしけるかぎりみなまいり給ふ。直衣にてかろらかなる御よそひどもなれば。したがさねばかりたてまつりくはへて。月やゝさしあがり。ふけぬる空おもしろきに。わかき人〳〵（院の車のうちそと）笛などわざとなくふかせ給ひなどして。しのびたる御まいりのさまなり。

仰事によりての様くよ
御進退あつかふべし

ゐんぐわんより　細（□□□）
世をすてゝおはします後
給へるとぞべし

うべきあらずハ御をとくらきさけれど（孟大宮よりの之）
しきほうつくしそばにてさまよはんぞう
れ給ひまゝ人のうへざ後にかゞ（おとゞの御はまうりの之）
しかうてこまかひそうかしとめて（仰信近於義也と云心よ）
まゐりよかくくゝりしまへれどいうかお（冷泉院の之）
どうゞ給ひしくこひひさし給ひとくの（細冷泉院の后宮）
ひまつるなりさらぐまくとゆるぐばい（之晩冷卅三歳之）
もどきこゆるのゝ御げんぶくいうつきも（冷泉院の之）
もそくぞ川るまつ侍従に成しきたくなる（孟十四歳の二月侍従也）（おゞ侍従も前もありし之也）
うゞんぞのゝみれうつくしかりのなきや
まとのことうぞ人あつかおりまく（孟二三歳のすぐれども之）
のきみん。せいのことうつゝぬゝくしこは

亭ききたる　細院御やうな
ともかりてあらても
つねと早又の御也
師院号の事さらせ見えが
あしへのやうにすゝしく
み後洞の院ふとめかゝき
へきし
秋ら後の人ても　西秋
ものあさつへんたんもお
らもこゝにして對秋好
源の程也　師槿歌説勝

まのぶもくこそうつくしてあらへ明かき（侍らず也）
にふさはしくおぼゆらん人くまうで（宗）
給ふ。六条院ハ中宮の御方にわたりまうで（細秋好也）
御拍給ゐしもとし給。今ハかうゐ見ゆる（孟見しらる源の御也）
御すまゐにさぶらふことをまうけべきな
まことはるけさとすぐらぬさひをそへ
てこきれぬ昔のあとりのかうあるどもを
給ひつゝまたまなしうせさせつるにな
みてもつかぬ身の御程にて。いすがにう
ねくもく。そころきくも何そあはん我よ
つき後の人々にのこるくまつけくだく
まよりくらしゝ御もうへさて御あそこの

朱雀女三宮など皆世
を背き給ふにをくれ
柏木などの世をはやく
れ給へるなど
くまにしたまふらうさ
ぐもさうしつけし
孟 秋好へおことわり也
とし 細 我門ひらけ也
と申せらるゝ也 我
うさ家のるすハならう
けまふへしとし

その人乃へそ
細 秋好の御母御息所也
よろしも今ハ隙もなく
て六条院へも細に参
まゐらぬよし 御九重
ハかへりて心ぼそく侍よう
なり給ひしもあるかな
みだハいつもとして出
つらなさのまさるまゝ
ようやの人のそむき 孟
おもふく皆人の世をよく 全
細 皆人の世を背き給ふ

こゝろぼそさの、のどめがたうおぼえ侍れ
ば、世ばなれたるすまひにもやと、やうやう（孟 遁世してもあるべき事と也）
おもひたちぬるを、のこりの人々の（孟 女三紫上などの事をたのみ給ふ也）
ものはかなからむ、たゞよはし給ふなと、さきざきも
聞えつけし心たがへず、おぼしとゞめて、物
させ給へなど、まめやかなるさまにきこ（秋好ノ）
えさせ給。例の、いとわかうおほどかなる（細 秋好の御事也）
御けはひにて、九重のへだてふかう侍（旧）
年ごろよりも、おぼつかなさのまさるやうに
思ひ給へらるゝ有さまを、いと思ひの（冷泉院の御世にて宮仕へし給ひしまゝ）
ほかにむつかしうて、皆人のそむきゆく世をいとは（べ 秋好の思ひ給ふ事也）
しう思ひなる事も侍りながら、その心のうち

のこゝろのうちを聞えさせ給はん 抄 此本意 秋好の御母御息所の事を思ひて自
然よ御菩提を申し
その仏乃くらゐと 細 御出家と源も心をとゞめ給ふべきにやとおぼしめして御出家の事を
師をんのこゝろとハ遁世の事也 源と此も思し置給へる事也。御出家とをとゞめ給はんの御心とおもひしせ給ふにや
申さしひらきよ秋好の御出家の事をつけさせ給ふべきを

りがせさしとし

さためなき世とハいひながら
細 世のハかなく無常なるさを知
を知ながら無常を観じてハ
てハたゞそうしとし

（源へ）聞えさせうけ給ハらねバ、何ごとも先
たのもしきかげにはきこえさせならひて、いぶ（孟 何事も）
（細 源の御事也 孟 内裏まうでハ）
せく侍ると聞え給。げにおほやけざまにて（も読合とらるゝと秋好の御こと）
（内裏よりも里へまかで給ふ事）
は、限ある御里居も、いとよう
うまちつけきこえさせしを、今は何事
につけてかは、御心にまかせさせ給（何事につけて御里居も御自由ならんと也）
ふ御うつろひも侍らん。さだめなき世とハいひなが
（晦 さしていとふべき事ありて世を背くハありがたき事と）
らも、さしていとはしきことなき人の、さ
はやかにそむきはなるゝもありがたう

故御息所　細六条御息所也
霊はおほふかう源へかく
くしあへどもかくれなき給
ひての給ふかく
人にうとまれ奉り給ふ名
のりなどの　孟御息所の
邪気に出まうすを
源のかくし給ふ

（細人々もすゝむまじき事と也）いやもうべき御じまつけくぐさのまの
くしさうつゝみ御ほうしのゝ竹衣て
（御おほはぢ人の首ざり世をのがるゝとぞまうすれか）うきひとりのよこさまよれ侍んならて
ひがくなりそぞろ世をしたすゝる人を
（孟中宮にて出家とかくおぼし源の御事）こそ侍りけれ。いとおほしまじきこと
（細中宮の御心）（源の中宮への詞）よかんと思しなを。ふかうなときこえ
（年ごろはなをさしもの心）給りぬるかりしと。つゝひきゝこし給
（孟秋好の御心）故御息所の御身のくるしうなり給ふらんあり
さまいかなる（多く）煙のなかにまよひ給ふら
ん。なき影にても人にうとまれ奉り
給ふ名のりなどの出くる事かの
（仲冷泉院の事）の院にはいみじうかくし給ひけるををのづ

ふかうのしういとしうて
孟御息所の物怪を経
しかぞきこえまし由
すゝめしきて故宮の
事也
さらにおもしけめでを
細物のけのおどろしくても
尾はものいづくさるもしと
あはり乗日
とされしての哀かりを
忘ぬるはかく物のあはさ
細只別の事てなくそ
後の世のくるしきを思ひ
あきらかにしるべし
いそがうちひきかえせん
細をやの成仏をすゝめく
ようきこえさする人の事
だくとけ大きうて　孟後

（中宮の御心）ら人のくちさがなくてつたへきこしめし
ける後いとかなしういみじくてなべての
（中宮の御心）世のいとはしく思しなりてかりにても
（細物のけのいひつるさまを[illegible]）かのゝ給ひをきけん有様のくはしうきかまほ
（正説まほにはまことにといふ心）しきをまほにはえうち出きこえ給は
（孟秋好の詞也）（細御息所也）で。たゞなき人の御ありさまのつみかろか
（師よそのくけのまゝ）（とあるへし）らぬさまにほのきく事の侍しをさる
しるしあらはならでもをしはかりつべき
ことに侍りけれど。をくれし程の哀ばかり
（喚後世の事）をわすれぬことにて。物のゝちをしり侍
へりけるがはかなさをいかでよう
いひきかせん人のすゝめをもきゝ侍りて

せめて御後世をたすけまゐらせん
の御心なるべし
かの炎の中にもさまし侍りにし
がな　盂ニ云 母の噴嘘
の焔（ホムラ）を消滅してさ
劫年のつりのうちをおもひ
てむつかしとぞ
その炎のなんれも
（抄）誰ものがるまじきを
[illegible]
[illegible]
ての二人よりうきまで
のあはれをしるべし
目蓮が仏にちかきとき
花目蓮はじめて六通
を得たるを仏よりちかき
といへり又仏に親近す
る人をわかれて其母
の餓鬼道に落たるを
救ひたる事盂蘭盆
経にとけり　細 目連救
母経ハ偽作の経也 只盂
蘭盆経によれりとぞ

かのほのほをもさまし侍りにしがなと、やうやうつもるになむ思ひしらるゝ事もありけるなど、かすめつゝぞのたまふ。げにさもおぼしぬべき事と、あはれに見たてまつりて、そのほのほなん誰ものがるまじきことゝしりながら、朝の露のかゝれるほどは思ひ捨侍らぬになん。目連が仏にちかきひじりの身にて、たちまちにすくひけんためしにも、えつがせ給はざらん物から、玉のかんざしすてさせ給はんも、この世にはうらみのこるやうなるわざなり。やうやうさるこゝろざしをしめ給ひて
（細 出家あるまじきと）（細 年のつもりかな）（細 源の心）（細 源の詞）（細 命のうちの事）（今のわりなくハ出家しかるべきと）（細 かの御けぶりはるべき事をの心也）（細 むかしのあはれとみるべし）

とハ仏に親近する義也
えつがせ給はざらむ　盂 母の堕獄せしを目連なればこそすくひたれ中宮ハ
の出家ありきともえすくひ給はじ
かくすくひがたきと也　細
よはるでんとし
玉のかんざしすてさせ給はんも
ちり　世の中をおもひすてや
めぐ周にて出家を
もはらさかりにてさくし
よかりし の　師 出家の
出家のしるしも今ハさハが
しくて明暮しかるべ
き世をそむきて源の出勤
あく一つに出家の路
をもまづかひらひ給を
んとおもひて出ひつく
るかさとし 抄 同義
よくかしら出家ひく
盂 源ハ出ひて出家
をとし源ハ出家ニアラ
ずとくしき候事

れ。かのけぶりはるべき事をせさせ給へ。しか思ひ給ふる事侍りながら、物さはがしきやうに、しづかなる本意もなきやうなるありさまにあけくらし侍りつゝ、みづからのつとめにそへて、今しづかにと思ひ給ふるも、げにこそ心をさなき事なれなど、世中なべてはかなく、いとひすてまほしき事をきこえかはし給へど、猶やつれにくき御身のありさまどもなり。よべはうちしのびてかやすかりし
（細 晴）（出家）（細 源もさる事おもひながら 抄 源ハ出家の本意あれどもえしかし給はぬと也）（細 両人の御心也 盂 源も猶出家しがたき也）（源の事）

ガラス使用

とて侍り給ふとぞ　抄同意
春宮の女御
細 明石女御也。おなじ冷泉院とは女御夕霧よりも猶大切なり 孟 明石
女御の事也 孟 明石
中宮も夕霧も此院の鍾愛の冷泉の御事を大切におぼすよし

御對面のまれなり
孟 細 御對面あるべきを
「さめ服殺あるごとし
師 冷泉院御位をさりては源に御對面まれなるを心やすくなされ急ぎて御位をさらせ給ふとぞ　抄同意

御ありきけさはあらはれて上達部どもまゐり給へるかぎりはみな御おくりつかうまつり給ふ。春宮の女御の御ありさまのならびなくかしづきたて給へるかひ〴〵しさも、大将（夕霧也）のまた人にことなるさまにておはするも、いづれとなくめやすきを、猶この冷泉院をおもひきこえ給ふ心ざしいとすぐれてふかく哀におぼえ給ふ（細 冷泉院也）。院もつねにいぶかしう思ひきこえ給しに（源をゆかしく思しめすと也）、御對面のまれにいぶせうのみおぼさるゝにいそがされ給ひて、かく心やすきさまにと思しなりけるなり。中宮（抄 秋好也）ぞ

中々まかで給ふ事もかたく
孟 秋好の御里出もなく
ならびておはしますゆへ
師 冷泉院おりゐの後は中宮御陰ハよくかなふべきよし
何事も御心やれる
細 秋好中宮の御満足なり
孟 何事も秋好の御満足なれども母御息所の事を歎き給ふ也
人のゆるしきこえ給ふまじき 冷泉院の御ゆるしあるまじければ 孟 源の御意見のごとく人の御ゆるしなく
功徳の事をたてゝ
孟 秋好の佛法を思ふとなりまさり給ふ
心ふかう世中を思しとれる 孟 秋好の心は世間の理りをさとりてふかくとりて佛法に心をいれて信心を凝（コラ）し

中々まかで給ふこともいとかたくなりて、たゞ人のなかのやうにならびおはしますに、いまめかしう中々むかしよりも花やかに御あそびをもし給ふ。なにごとも御心やれるありさまながら、たゞかの御息所の御ことを思しやりつゝ（秋好の御發心の事）、おこなひの御心すゝみにたるを、人のゆるしきこえ給ふまじきことなれば、功（く）徳（どく）のことをたてゝおぼしいとなみ、いとゞこゝろふかう世中をおぼしとれるさまになりまさり給ふ。六条院ももろ（源氏も秋好も）ともにいそぎ給て（ともに御息所の御弔あるごとし）、御八講（かう）などせさせ

ガラス使用

別 3 60 1

まふくし歌 秋夜の巻（心あつまる事ふくみえ より法花家の本文に八）　あさき世捨しぞ
人ゆきなるなれば源乃新吏人家ゞもくまる所の功徳法くしいはま
御心中より世の中をふかくおぼし入玉ふとなり

ガラス使用